関わったメルメ・ド・カション（Mermet de Cachon、1828－1871 ？）でした。彼は条約が批准された後も殆ど日本に滞在して、三代のフランス公使に仕えると共に、のちに徳川幕府の幕閣に名を連ねることになる人々にフランス語を教えるなどしながら、約8年間にわたって日本に滞在しました。その間、蚕病による絹糸業の不況を克服するため、日本との通商条約締結に訪れたイタリア使節団の交渉を助けたこともありました。外交感覚に長けていたため、日本人から「妖僧」や「奸物」[2] などと警戒されていた人物でもあります。

カションは日本国内に滞在する間に『養蠶秘録』を入手し、フランス語へ翻訳してイタリア人のイシドール・デローロに手渡し、これをデローロがイタリア語に翻訳しました。若干の時を経て、このイタリア語になった書物をフランス人のL.-N. ペクールという人物が再びフランス語に翻訳して、1866（慶応二）年にサン・マルシェランで印刷しました。この1866年という年は、奇しくもカションが日本を去った年でした。

現在、このフランス語訳本を入手することはできませんが、フランス国立図書館が所蔵しており、資料もデジタル化されています。ここからは、タイトルが *De l' éducation des vers à soie au Japon* で、内容は48頁の抄訳本で、二人の絵師の絵はなく、同館の書誌データでは論文の扱いになっていることがわかります。また、この標題紙からは前述のように、フランス語からイタリア語に翻訳され、再びフランス語に翻訳された経緯が理解できます。

また、イタリアのフィレンツェ国立中央図書館の書誌データでも、1865（慶応元）年のイシドール・デローロによる同国語への翻訳論文 *Il modo di allevare i bachi da seta al Giappone* の所蔵を確認できるのです。

■初めての海外への技術移転として

上垣守國の『養蠶秘録』はこのようにしてフランスやイタリアに拡がり、これらの国の絹糸産業を助けました。また、この上垣の著作だけでなく、他の日本人の幾つかの著作がヨーロッパへ持ち出されて翻訳されています。例えば、原典は不明ですが『養蚕新説』[3] という書物は、フランスの有名な日本研究家レオン・ド・ロニーによって1868（慶応四・明治元）年に*Traitè de l'éducation des vers à soie au Japon* として翻訳・刊行されています。また、書物形態で著されたものだけではなく、農業系の専門雑誌に収録された論文形態もありました。

Traitè de l'éducation des vers à soie au Japon.
（本学図書館所蔵）

江戸時代に日本国内で養蚕の専門書が新しく生まれる中で、ひときわ知見の高いシーボルトやカションが上垣の『養蠶秘録』に着目した理由は、養蚕や製糸、真綿の作り方が絵を添えながら体系付けて書かれており、内容が際だって優れたものと評価したためだと考えられます。

このようにして、本書は当時の殆どの日本人が知らない間に外国に持ち出され活用され、結果的に日本で初めてとも思われる国内技術の海外移転になっていたのです。

因みに、シーボルトからホフマンに渡った書物の刊行は、上垣守國が『養蠶秘録』を世に出して45年、カションが翻訳したもののフランスでの印刷は63年を経ていました。

主な参考文献と脚注

（1）「富岡製糸場と養父市の養蚕」養父市教育委員会社会教育課。
（2）富田仁著『メルメ・カション　幕末フランス怪僧伝』 有隣堂　昭和55年。144－145頁。
（3）鮎沢啓夫「欧訳された養蚕新説」農業史研究会会報 第3号1－2頁。

おく　まさよし（司書・図書館副館長兼事務長）